CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

国立国語研究所学術情報リポジトリ

接辞性字音語基の性格

著者	野村 雅昭
雑誌名	電子計算機による国語研究
巻	9
ページ	102-138
発行年	1978-03
シリーズ	国立国語研究所報告 ; 61
URL	http://doi.org/10.15084/00001057

接辞性字音語基の性格

野　村　雅　昭

0.　はじめに
1.　量的な側面
　1.1　字音語基中の使用量
　1.2　使用度数と結合力
2.　用法の分類
　2.1　前部分の接辞性語基の分類
　2.2　後部分の接辞性語基の分類
3.　接辞性字音語基の機能
　3.1　語基と接辞
　3.2　字音形態素の品詞性決定機能
　3.3　前部分の接辞性語基の機能
　3.4　後部分の接辞性語基の機能
　3.5　造語成分というかんがえ
4.　おわりに

0.　はじめに

語（単語）が，それよりも，ちいさな単位から構成されることがあるのは，いうまでもない。形態素という概念は，語を分解してえられる，意味をになう最小の単位という意味で，語を構成する言語単位をさすのに，便利である。ただし，語構成を記述するという観点からは，さらに，それを区分して，単独でも，語を構成することができ，語の中核的な意味をになうものと，それ自身では，語を構成することができず，つねに他の単位と結合して出現し，形式的な意味を付加するものといった分類が可能である。以下では，前者を，語基，後者を，接辞とよぶことにする。

このような定義は，それ自体は明確であり，かつ，かなり有効なのであるが，実際に語を分析していくと，処理しきれないケースにぶつかることがある

のも事実である。たとえば，形態素という概念にしても，最小の単位ではあっても，意味をになっているとはみられないものが，とりだされることがある。(「ずだぶくろ」の「ずだ」など。宮島達夫は，日本語について，このような無意味形態素とでもいうべきものの例を，たくさんあげて，その考察をおこなっている。→文献①）また，語基と接辞を区別する，語構成能力や意味の実質性などについても，そのいずれとも判定できないものが，おおく存在することは，たしかである。

特に，日本語で問題になるのは，漢字で表記されることを前提とするような，字音形態素とでもいうべき単位である。これらは，中国語では，単音節であったけれども，アクセントや音節構造の複雑さによって，単語としての存在を保障されていたものである。ところが，日本語の音韻体系のなかでは，1音節ないしは2音節で発音され，せいぜい300種程度の音素のくみあわせパターンしかない。したがって，これらは，音節数のすくなさと，音節構造の単純さのために，音声的には，きわめて不安定な単位であり，漢字で表記されることをささえに，日本語の形態素としての資格を，かろうじて，もちつづけてきたものである。そして，これらのおおくは，単独で語を構成することはすくなく，他の字音形態素と結合することによって，はじめて，音節数のうえでも，語構成能力のうえでも，安定した単位となるのが普通である。つまり，二字漢語とか二字熟語といわれるものがそれである。

これらの，二字漢語の構成要素となっている字音形態素は，少数の例外(「必然」の「然（ゼン)」・「端的」の「的（テキ)」など）をのぞけば，意味のうえからは，語基とみなすのが適当である。つまり，字音語基ということになる。これらは，たしかに，形態的に不安定であり，単独で語を構成することもすくないが，「詩（シ)」・「鉄（テツ)」・「茶（チャ)」・「関（カン）する」・「特（トク）に」のように，単独で，あるいは，派生などの方法で，語を構成することができるものも，あることから，語基としてあつかっても，よいであろう。また，これらを，接辞とすれば，接辞と接辞が結合して，語を構成していることになり，はじめの定義との矛盾が，いっそう，おおきくなってしまう。もっとも，これらの字音語基の結合形を，和語語基や外来語語基の結合形とおなじ

ように，複合語としてあつかうことには，無理がある。字音語基どうしの結合形，つまり，二字漢語は，結合しても，一語基相当の機能しかもたないからである。（森岡健二は，これらの字音語基の結合形を，複合語基として処理することを提唱している。→文献②）

ところで，現代語では，この字音語基のなかに，二字漢語の成分としての用法だけでなく，すでに存在する和語や外来語の語基，あるいは，字音複合語基（二字漢語）と結合する用法をも，もつものが存在する。「無-届け」・「今-シーズン」・「近代-化」・「研究-者」・「事務-室」・「アメリカ-人」などの「無（ム）」・「今（コン）」・「化（カ）」・「者（シャ）」・「室（シツ）」・「人（ジン）」などがそれである。このような用法は，二字漢語中の成分としての用法と無関係ではない。しかし，なかには二字漢語中の成分としての機能とことなるものがあること，この用法が近代になってからめざましい発達をとげたこと，現在もなおこの方法による造語がさかんにおこなわれていること，などの理由から，注目してよいとおもわれる。また，国語辞書などのあつかいでは，これらのあるものを，「接辞」あるいは「接辞的成分」としたり，二字漢語中の成分とおなじに「造語成分」あるいは「語素」としたりというように，まちまちであり，かりに，「接辞」とするにしても，どの範囲までをそれにふくめるかについては，統一した見解は，しめされていない。

たしかに，この種の字音語基には，種々の性質のものが混在している。しかし，それを，ばあたり的に処理するのではなく，総合的な見地にたって，分析することが必要である。以下では，これらの字音語基を，かりに一括して，接辞性字音語基とよぶことにする。つまり，これらは，すでに存在する，和語・外来語の語基，および，字音複合語基，そして，それらの結合形に，前部分あるいは後部分から結合する，字音形態素ということになる。それを，接辞性字音語基とよぶことは，結論をさきどりしたことになるかもしれないが，便宜にしたがって，そのように仮称する。

筆者は，さきにも，この種の語基について，言及したことがあった（→文献③～⑥）。しかし，主たる目的のおきかたがことなっていたり，部分的な論究であったりしたため，徹底したものではなかった。以下では，うえにのべたよ

うな観点から，接辞性字音語基全般を対象として，その種類・機能などについて，のべることになるであろう。

なお，以下で，考察の対象とする主たるデータは，現代新聞の漢字調査（→文献⑦）に出現したものである。また，部分的には，科学技術情報センター資料部が，『キーワード　リスト』（→文献⑧）にもとづいて作成した部内資料である，「BASE LIST」から，用例を補充することもある。

1. 量的な側面

1.1 字音語基中の使用量

新聞の文章に出現する，この種の語基が，字音語基全体のなかで，どのようなわりあいをしめているかを，表1にしめす。表1は，文献⑦（56ページ）からの再掲であるが，この数字は，つぎのことを意味している。

表1　字音語基の語構成単位別の使用度数

（　）内の数字はパーセント

	自立用法	結合用法	接辞的用法		計
			前部分	後部分	
ことなり	510 (12.5)	2,721 (66.6)	250 (6.1)	605 (14.8)	4,086 (100.0)
のべ	12,280 (1.9)	514,822 (81.9)	13,926 (2.2)	87,829 (14.0)	628,857 (100.0)

(1) ＜のべ＞の計の628,857は，標本となった991,375字の漢字のうち，人名・地名，数詞，借字などをのぞいた，一般用法から，さらに，訓としてもちいられたものを，さしひいたものである。したがって，かなで表記されたものは，ふくまれていない。

(2) ＜自立用法＞とは，字音形態素が，単独で，名詞としてもちいられたばあいのほか，いわゆるサ変動詞や形容動詞の語幹や，「単なる」・「特に」のように，連体詞・副詞の語基となっているものをふくむ。

(3) ＜結合用法＞とは，いわゆる二字漢語の成分となっているもののほか，「段-ボール」・「ゴム-印」のように，外来語や和語の語基と結合しているものでも，下記の(4)に該当しないばあいは，それをふく

む。

(4) ＜接辞的用法＞とは，この調査の作業規則で，1短単位とされるもの（ほぼ，単語相当），および，それをふくむ結合形に，前部分あるいは後部分から結合するものをいう。ただし，和語との結合形で，全体の音節数が6以下のもの，および，外来語との結合形で外来語の音節数が3以下のもののばあいは，それぞれの字音語基は，＜結合用法＞とする（たとえば，「はしご-段」・「カメラ-店」の「段」・「店」など）。なお，この規則にかかわらず，和語・外来語の語基と結合した，「中（ちゅう）・間（かん）・内（ない）・辺（へん）・的（てき）・風（ふう）・様（よう）・状（じょう）・体（てい）・級（きゅう）・流（りゅう）」は，＜接辞的用法＞とする。

(5) ＜ことなり＞のかずは，字音を基準としているため，「立方-体」の「体（タイ）」と「世間-体」の「体（テイ）」とは，区別しているが，下記のようなばあいは，その区別をせずに，1種類としてある。

式$_1$……結婚～，卒業～，落成～

式$_2$……自動～，回転～，アメリカ～

式$_3$……方程～，不等～，

もし，これらを別にかぞえるとすれば，＜接辞的用法＞のばあいは，つぎのようになる。ただし，意味による判定であるから，基準のたてかたによって，そのかずには，異同があろう。（なお，下記の数字には，表1にふくまれない，「女子-大」の「大」のような略語の語基が，前部分では，4，後部分では，36，ふくまれている。）

前部分語基……258

後部分語基……699

（以上の(1)～(5)についての，くわしい説明は，文献⑦にある。）

表1からうかがえることは，＜ことなり＞・＜のべ＞のいずれでも，結合用法が圧倒的におおいことである。自立用法は，＜ことなり＞はともかく，＜のべ＞では，きわめて，わずかな部分しかしめていない。接辞的用法は，結合用法にくらべれば，そうおおいとはいえないが，自立用法との比較でいえば，結合用法につぐ量をしめている。このような傾向は，おそらく，近代になって，

いちじるしくなったものとみられる。この結果とくらべる資料はないが，もし，明治期の新聞について，同様の集計をおこなえば，自立用法と接辞的用法の比率は，逆転はしないまでも，かなり接近したものになるであろう。

接辞的用法のうち，前部分にくるものと後部分にくるものを比較すると，<ことなり>・<のべ>とも，後部分にくるもののほうがおおい。これは，後部分にくるものには，二字漢語の成分としても後部分に位置し，類概念をあらわすような名詞的語基が，接辞的な用法をもつようになったもののおおいことと，新聞という文章の特色として，数詞についてつかわれる，助数詞的なものや，地名に承接するものがおおいことによるとみられる。<のべ>のばあいに，その差がいっそうおおきくなることは，特に，後者の理由によるものとみられる。

1.2 使用度数と結合力

接辞性字音語基の量的な側面からの分析としては，さらに，それぞれが，どのくらい使用され，どれだけの種類の語基と結合しているかということが問題になる。表2は，各語基の使用度数の分布を，表3は，各語基の結合対象となる語基のかずの分布を，それぞれ，しめたものである。

これによると，使用頻度と結合対象語基数のどちらにおいても，後部分語基のほうが，平均的に分布している。つまり，平均してよく使用され，他の語基と結合するちからをもっている。それに対して，前部分語基のほうは，少数のよくつかわれ，結合力のつよいもののほかは，おしなべて，使用頻度がひくく，特定の語基としか結合しない傾向がみられる。むろん，これは，相対的な

表2 接辞性字音語基の使用度数分布

度数区間	前部分	後部分
～1000	3	16
999～100	24	139
99～ 10	70	246
9～ 4	42	124
3～ 2	52	94
1	67	80
計	258	699

表3 接辞性字音語基の結合対象語基数の分布

度数区間	前部分	後部分
～100	3	13
99～ 10	41	187
9～ 4	39	120
3～ 2	67	143
1	108	236
計	258	699

傾向差であって，絶対的なものではないが，特に，結合力の面で，そうした差異がうかがえるようである。

つぎに，使用頻度のたかいものと，結合力のつよいものを，例示して，比較をこころみる。数字は，使用度数および結合対象語基数をしめす。なお，結合対象語基では，数詞，人名，地名などは，ことなるものを，それぞれ１回とはかぞえず，全体で回数１とみなす。（たとえば，後部分語基の「○○-県」は，「山形～，新潟～，千葉～」のような例があっても，回数は１である。）

〔前部分語基の比較〕

＜使用度数＞		＜結合対象語基数＞	
第2216	（～○日・～○回）	同 ?	（同左）
大1380	（～企業・～部分）	大 237	（同左）
同1273	（～議員・～対策本部）	新 203	（同左）
約 959	（～半数・～○人）	各 116	（同左）
新 838	（～幹線・～製品）	全 93	（同左）
全 438	（～世界・～貴任）	不 83	（同左）
総 393	（～監督・～選挙）	両 77	（同左）
各 342	（～省庁・～方面）	無 70	（同左）
小 309	（～規模・～委員会）	総 66	（同左）
核 308	（～兵器・～実験）	御 64	（～予算・～奉仕）
不 303	（～可能・～安定）	再 53	（同左）
副 303	（～総裁・～会長）	諸 53	（～問題・～経費）
無 276	（～関係・～条件）	小 47	（同左）
再 213	（～検討・～放送）	超 39	（～党派・～特急）
非 193	（～常識・～能率的）	核 36	（同左）
都 192	（～知事・～議会）	好 36	（～記録・～投手）
前 178	（～首相・～車輪）	最 30	（～優先・～高級）
両 161	（～陛下・～陣営）	副 30	（同左）
高 149	（～気圧・～利回り）	前 29	（同左）
旧 146	（～陸軍・～勢力）	未 28	（～完成・～発表）

ここには，それぞれの上位20語基までをあげた。「同」の結合対象語基数が？になっているのは，漢字調査の際に，集計を中途でやめたためである。概していえば，結合力のつよいものは，使用度数もおおいといえそうである。使用度数のおおきいほうの20位にはいっていない，「御・諸・超・好・最・未」の6語基は，いずれも，40位までには，出現する。逆に，使用度数のおおいものは，結合力がつよいということも，いえそうであるが，「第」と「約」だけが例外となる。結合力のつよい20位にふくまれていない，「非・都・高・旧」は，20種以上の語基と結合しているが，「第」と「約」は，数詞ないし数量をしめす語基としか結合しないためである。それをのぞけば，前部分語基では，使用度数と結合対象語基数との相関は，たかいといえよう。

〔後部分語基の比較〕

＜使用度数＞		＜結合対象語基数＞	
日(ニチ)5544	（＜数詞＞～）	的534	（同左）
円4658	（＜数詞＞～）	者376	（同左）
年3757	（＜数詞＞～・豊漁～）	中236	（同左）
月(ガツ)3286	（＜数詞＞～）	化206	（同左）
的3123	（積極～・現代～）	会167	（同左）
者2508	（科学～・関係～）	性165	（可能～・生産～）
人(ニン)2410	（通行～・＜数詞＞～）	部146	（同左）
時2403	（＜数詞＞～・非常～）	用141	（家庭～・工業～）
会2099	（委員～・座談～）	力122	（競争～・防衛～）
区1868	（選挙～・＜地名＞～）	局121	（事務～・放送～）
回1537	（＜数詞＞～）	後110	（終戦～・数年～）
分(フン)1287	（＜数詞＞～）	品103	（食料～・記念～）
市1261	（＜地名＞～）	所101	（同左）
長1181	（幹事～・支店～）	上 95	（事実～・地球～）
氏1090	（＜人名＞～）	地 91	（住宅～・分譲～）
党1009	（保守～・多数～）	家 87	（評論～・政治～）
県 925	（＜地名＞～）	費 87	（建築～・予備～）

中 896	(午前～・前売～)	車 84	(同左)
員 896	(公務～・組合～)	式 79	(折りたたみ～・回転～)
省 810	(外務～・国防～)	室 79	(休憩～・図書～)
所 801	(研究～・裁判～)	権 78	(選手～・選挙～)
間 794	(両国～・三遊～)	期 77	(転換～・適齢～)
度 783	(<数詞>～)	金 73	(退職～・補助～)
部 781	(宣伝～・文学～)	派 73	(主流～・戦前～)
化 744	(機械～・正常～)	内 72	(団地～・年度～)
都 732	(東京～)	員 71	(同左)
階 685	(<数詞>～)	率 71	(視聴～・死亡～)
社 608	(新聞～・出版～)	課 70	(総務～・観光～)
町(ナヨウ) 600	(<地名>～)	感 70	(連帯～・不信～)
車 592	(乗用～・機用～)	店 69	(喫茶～・小売～)

ここには，30位までをあげた。一見して，前部分語基との相違があきらかである。このリストで，双方に共通するのは，9語基だけである。両者が一致しない理由は，使用度数のおおいもののなかに，数詞や地名に接続する語基が多数存在するためである。逆に，結合対象語基数のおおいものは，ほぼ使用度数のおおいものといえるが，「式177(109位)」，「感154(121位)」のように，100位に，はいらないものもあり，前部分語基のばあいほど，一致度はたかくない。

このような差異が生ずるのは，文章中にしばしばあらわれる，時間や場所をあらわす表現に，接辞性字音語基が後部分として，よくつかわれるということにほかならない。データが新聞の文章からえたものであるだけに，より一層その傾向はつよいとおもわれる。

あるいは，観点をかえれば，結合力ということのかんがえかたにもよる。ここでとったように，地名，人名，数詞を回数1としてかぞえるから，このような結果がでるのであって，それを，1回ずつ別にかぞえれば，使用度数と結合力は，もっと，つよい一致度をしめすことになろだろう。しかし，地名や数詞につく字音語基は，たしかに，つよい結合力をもっているが，それを造語力という語におきかえてみれば，問題の所在は，はっきりする。

かりに，1年を13か月とする暦法が制定されたとする。そうすると，「十三-月」という結合形ができることになる。また，A省の○○局とB省の××局が合併して，「△△-庁」という官庁ができたとする。そのばあいに，前者と後者では，どちらが新語がうまれたという感じがつよいだろうか。もし，後者だとこたえるひとがおおいとすれば，それは，結局，「月（ガツ）」と「庁（チョウ）」という字音語基の機能のちがいにもとづくものである。前者では，十三が十四になろうが，十五になろうが，単語としては，既成のパターンの空白がうめられたにすぎない。しかし，後者のばあいには，造語上の制約はあるにしても，どんな語基が△△の部分にうまるかは，わからない。前部分語基と後部分語基の，使用度数と結合力の関係にみられるちがいは，こうした観点から，説明ができる。

結合力ということについて，地名や数詞につくものをのぞいても，使用度数がおおきいのに，結合力がちいさいということは，おこりえる。前部分語基の「立-候補」の「立」は，使用度数では39位だが，この結合形しか存在しない。同様に，後部分語基の「不動-産」の「産」は154位であるが，「産」は他の語基とは，結合しない。このような「立」や「産」を接辞性語基とみるか，二字漢語の構成語基とみなすかという点でも，論ずる必要はあるが，結合力については，使用度数と結合対象語基数のほかに，集中度といった観点も必要であろう。なぜならば，複数の語基と結合するものでも，特定の語基に使用度数がかたよるばあいと，その反対のばあいが，かんがえられるからである。それについては，これまでも，類似の現象について，国語学の世界で，いくつかの統計的尺度がこころみられている。それを適用するのも，興味ぶかいが，わきみちにそれそうなので，ここでは，これ以上，問題をひろげることは，ひかえたい。

前部分語基と後部分語基では，後者にくらべて，前者のほうがバラエティにとぼしいことは，すでに指摘した。そして，結合力の面でも，おなじことが指摘できる。さきの表3や前掲のリストからも，あきらかなように，結合対象語基のかずには，いちじるしいちがいがある。対象語基数が100をこえるものは，前部分語基が3であるのに，後部分語基は13をかぞえる。これは，それぞれの

結合対象となる語基の性質によるものである。後部分語基は，類概念をあらわすものや，抽象度がたかいものがおおい。したがって，そのまえには，種差をしめしたり，実質的な意味をになう，種々の語基がくることになりやすい。それに対して，前部分語基は，あとにくる語基とのあいだに修飾関係をもつことになりやすく，純連体詞的なものをのぞけば，被修飾語の意味的な特徴によって，前部分の語基の性格が限定されてしまうからである。

2. 用法の分類

2.1 前部分の接辞性語基の分類

ここでは，接性辞語基を，そのつかわれかたによって，おおづかみに分類する。まず，前部分語基について，分類した結果をしめす。

① 体言型…党（～大会）・核（～爆発）・都（～知事）・脳（～細胞）・県（～議会）・女（～生徒）・軍（～首脳）・税（～負担）

② 連体修飾型…大（～都市）・中（～学校）・小（～規模）・高（～気圧）・低（～姿勢）・新（～幹線）・古（～美術）・重（～機械）・軽（～金属）・好（～記録）・悪（～天候）・長（～距離）・短（～時間）・名（～選手）・同（～年配）・乱（～気流）・活（～火山）

③ 連用修飾型…再（～検討）・最（～年少）・既（～発表）

④ 連体詞型…同（～議員）・本（～○日）・前（～会長）・現（～総裁）・旧（～陸軍）・今（～国会）・来（～シーズン）・故（～○○氏）・副（～総理）・準（～決勝）・全（～日本）・総（～選挙）・各（～省庁）・両（～陛下）・諸（～外国）

⑤ 用言型…反（～政府）・超（～党派）・対（～共産圏）・有（～意義）・過（～保護）・要（～注意）

⑥ 否定辞型…無（～意識）・不（～明朗）・未（～発表）・非（～協力的）

⑦ 数量限定型…第（～○日）・約（～○分）・満（～○歳）

⑧ 敬意添加型…御（～婚礼）・令（～夫人）

この分類は，前部分語基と後部分語基の品詞性，および，その結合関係によったものであるが，さして厳密なものではない。⑥～⑧は，意味的な特徴に注

目して，一類をたてたが，原則にしたがえば，⑥は⑤に，⑦は④に，⑧は②に，それぞれ，ふくめることができる。量的には，①と②に属するものがほとんどで，おのおの，35～40パーセント程度をしめ，④が10～15パーセント，⑤が約5パーセントといった比率である。

①体言型は，種類はおおいが，結合力のおおきいものはすくなく，使用頻度のひくいものがおおくみられる。かならずしも，自立性をそなえたものばかりではないが，実質的な意味的をもち，一般の「名詞＋名詞」の構造をもつ複合名詞とおなじ構造をもっているとみることができる。

②連体修飾型は，和語複合名詞の「形容詞（形容動詞）語幹＋名詞」の構造に擬せられるものである。後部分にくる体言性語基を修飾して，その性質や状態を説明するもので，種類が豊富である。字訓との関係でいえば，例にあげた，「乱・活」のように，動詞的なものもふくまれる。ほかに，「乾（～電池）」・「終（～列車）」などの例がある。後部分の語基が動作性をふくんだものであるときは，この種の動詞的なものは，連用修飾的な結合関係をも構成する。「追（～起訴）」・「誤（～操作）」・「試（～運転）」のようなばあいである。「密（～入国）」・「軟（～着陸）」のように，形容詞（形容動詞）的訓との対応があるものにも，同様のことがいえる。

③連用修飾型は，副詞訓との対応がかんがえられるもので，例にあげたほかは，「極（～超短波）」があるのみで，かずはすくない。後部分語基に，動詞性・形容詞性のものをしたがえるのが特徴である。その点では，うえにのべた②のなかで，後部分に動詞的な語基がくるものと，あわせて，一類とすべきかもしれない。

④連体詞型には，種々のものがふくまれ，もっとも問題がおおい。これを一類するのは，音声言語のばあいに，後部分語基とのあいだに，ポーズがおかれるものがあることにもよるが，連体修飾的関係という点では，②とおなじである。ただし，②との比較でいえば，②の修飾関係が，後部分語基の内容にかかわるものであるのに対し，④のばあいには，文脈内での指示，他者との関係の表示，範囲・量の限定など，直接，内容にかかわらないものといった特徴をあげることができよう。ただし，「本（～○日・～大学・～年度）」の「本」を，こ

の類にいれることはみとめられても，「本（～会議・～場所・～調子）」の「本」を，②と④のどちらに属するものとみるかというような点で，問題はのこる。前者の類だけを，④に属するものとすれば，かずは，すくなくなる。⑦数量限定型は，つねに数詞をともなうので，別類としたが，ここにふくめておいても，さしつかえない。

⑤用言型は，動詞性の前部分語基と名詞性の後部分語基とのあいだに，意味上の格関係がみられるものである。つまり，前部分語基が述語に相当するもので，語基の意味的な連接関係が，文中の普通の語順とことなる点に特徴がある。二字漢語では，「読書」・「着陸」など，このような語順をとるのが普通であるが，三字以上の結合形では，この種の構造をもつものが，これまでに，例外的なものをのぞいては，なかっただけに，注目される。また，みかけの構造は，②の「活（～火山）」・「乱（～気流）」とおなじであるが，機能はことなる。ただし，「超（～満員）」・「反（～主流）」などの用法には，②や④と共通する面もみられる。それについては，後述する。

⑥否定辞型は，後部分の語基に否定の意味をあたえるとともに，結合形全体の品詞性をかえる点に特徴がある。また，意味的な結合順序が普通の語順とことなる点で，⑤とにている。ただし，それぞれの語基の性格には，すこしずつ差異がある。「非」は，いまのべた「超」・「反」と同様に，②ないし④的な性質がつよい。また，「未」は，③の連用修飾型の特徴をもそなえている。

以上にみたように，前部分語基のおおくは，後部分語基に対して，修飾的な機能をもっている点では，共通した性格がみられる。ただし，連体修飾的な関係にも，すくなくとも二種類のものがありそうである。また，少数ではあるが，倒置した結合関係をもつものもある。それらについては，接辞性語基の機能を論ずる章で，あらためて，検討することにする。

2.2 後部分の接辞性語基の分類

後部分の接辞性の語基は，種類もおおく，用法も多岐にわたり，一貫した原則で分類することは，前部分語基のばあいよりむずかしい。語基の品詞性に注目すれば，特定の種類に集中することになり，意味による下位区分をほどこさざるをえなくなる。しかし，意味に重点をおくならば，それはそれで，また，

別の分類原理をたてることが可能であり，結局，両者の折衷的なものにならざるをえない。

① 体言型

<時>期（決算～）・機（得点～）・節（紀元～）・時（着陸～）・年（豊漁～）

<場所>地（震源～）・点（交差～）・部（山間～）・帯（火山～）・域（冷水～）・区（禁漁～）・方（東北～）

<組織・集団>国（先進～）・県（農業～）・街（住宅～）・村（無医～）／府（総理～）・省（文部～）・庁（気象～）・局（郵便～）・部（総務～）・所（研究～）・署（消防～）・院（人事～）・園（保育～）・社（新聞～）・校（名門～）／場（競技～）・駅（終着～）・店（百貨～）・館（図書～）／会（理事～）・党（保守～）・隊（捜索～）・団（調査～）・班（救護～）・派（穏健～）

<人間>人（ジン）（日本～）・人（ニン）（通行～）・者（経営～）・家（評論～）・相（国務～）・官（警察～）・員（会社～）・士（弁護～）・師（美容～）・手（交換～）／長（委員～）・王（ホームラン～）・主（商店～）／生（大学～）・児（混血～）・婦（看護～）・女（修道～）／兵（少年～）・僧（破戒～）・医（歯科～）・商（宝石～）・工（溶接～）／客（観光～）・犯（現行～）・狂（野球～）・通（消息～）

<事象>事（関心～）・禍（豪雨～）・難（就職～）・病（伝染～）・死（事故～）

<活動>祭（芸術～）・式（入学～）・展（写真～）・戦（対校～）／賞（芥川～）・刑（罰金～）・罪（傷害～）／業（建設～）・漁（はえなわ～）・選（参院～）・便（定期～）／学（物理～）・教（イスラム～）・道（合気～）・史（美術～）／劇（時代～）・楽（交響～）・紙（地方～）・誌（週刊～）・作（話題～）／説（天動～）・論（抽象～）・報（注意～）・記（観戦～）・文（抗議～）／語（流行～）・弁（東北～）・名（商品～）／金（退職～）・費（建築～）・給（初任～）・税（所得～）・料（入場～）・債（地方～）

<精神・抽象>愛（人類～）・心（愛国～）・観（人生～）・感（安心～）・美（肉体～）・悪（社会～）・欲（知識～）・苦（生活～）／法（国内～）・令（戒厳～）・制（天皇～）・権（団結～）／案（修正～）・例（具体～）・策（解決～）・法（治療～）／力（原子～）・能（放射～）

<物>物（水産～）・品（食料～）・料（調味～）・材（断熱～）・質（たんぱく～）・分（脂肪～）・素（栄養～）・子（中間～）／肉（輸入～）・膜（横隔～）・骨（頭蓋～）／漁（熱帯～）・鳥（保護～）・虫（寄生～）・馬（競争～）・犬（盲導～）／林（原始～）・樹（街路～）・菌（結核～）／水（地下～）・岩（安山～）・鉱（クローム～）／池（貯水～）・堤（防波～）・港（貿易～）・道（地下～）・路（滑走～）・橋（歩道～）／塔（管制～）・堂（議事～）・台（展望～）／船（貨物～）・機（戦闘～）・車（自動～）／機（計算～）・器（注射～）・計（温度～）・管（真空～）・線（電話～）・具（運動～）・銃（ライフル～）・灯（螢光～）・庫（冷蔵～）／服（学生～）・地（カーテン～）／食（離乳～）・酒（ぶどう～）／薬（睡眠～）・剤（殺虫～）／紙（包装～）・券（乗車～）・図（設計～）・表（一覧～）・画（風景～）

<範疇・分野>系（文科～）・類（海草～）・層（読者～）・群（学校～）・界（芸能～）・面（軍事～）・別（年齢～）・級（幹部～）・等（官庁～）

<位置・順序>上（地球～）・中（チユウ）（大気～）・下（氷点～）・内（家庭～）・外（時間～）・前（使用～）・後（終戦～）・末（年度～）・中（ジユウ）（世界～）・間（国際～）／順（先着～）・来（昨年～）

<数量・程度>数（生徒～）・額（支給～）・値（平均～）・点（合格～）・差（個人～）・率（競争～）・度（信頼～）・限（最少～）

<助数詞>個・件・点・本・枚・杯・台・回・度・階・段・名・人（ニン）・歳・頭・匹／年・月（ガツ）・日（ニチ）・時・分（フン）・秒／円・銭・分（ブ）・厘・毛／番・位・次・着・等／半・倍・分（ブン）・代・強・弱

② 用言型…産（近海～）・製（外国～）・卒（大学～）・秘（部外～）・発（<地名>～）・着（<地名>～）・営（○○市～）・立（○○町～）・刊（隔月～）・編（<人名>～）・著（<人名>～）・増（定員～）・減（収入～）・視（絶望～）・化（活発～）

③ 相言型…的（積極～）・性（柔軟～）・用（婦人～）・風（シャンソン～）・調（文語～）・状（のり～）・然（奥様～）・大（はがき～）・裏（成功～）・様（ヨウ）（アイクチ～）・式（自動～）・流（金釘～）

前部分語基にくらべて，分類の原理そのものは，単純である。①体言型に属

するものが圧倒的におおいため，むしろ，①のなかの意味分類のほうに，中心があるかのような整理結果におわってしまった。しかし，意味分類そのものは完全なものでなく，未整理のものが，かなり，のこっている。

前部分語基が，基本的には，修飾関係にありながら，種々のタイプをもっているのに対して，後部分語基のばあいが単純なのは，後部分語基が名詞性ということでは，共通した性格をもっているからである。つまり，おおざっぱにいえば，後部分語基と，そのまえにくる語基の結合関係は，一般の「名詞＋名詞」の構造にひとしい。「名詞＋名詞」の構造は，決して単純ではないが，その分析をここでこころみても，問題は，いっそう複雑になるだけで，用法を概観するという目的から，いっそう，とおざかることになるだろう。

①体言型に属するものでは，＜組織・集団＞，＜人間＞など，活動の主体となるもの，＜活動＞およびその所産に関するもの，＜物＞，とくに生産物に関するものがおおい。また，＜助数詞＞としたものも，ひじょうにおおい。もっとも，＜助数詞＞を他の意味範疇と同列にならべることには，問題がある。むしろ，①～③の型と併列して，＜数詞承接型＞とでもいう類をたてたほうが，よいかもしれない。

それをしなかったのは，ひとつには，助数詞の範囲が画定しにくかったからである。「-個」・「-歳」・「-秒」などは，後部分の用法としては，たしかに，数詞につく用法しかもたない。しかし，助数詞として，よくつかわれるものが，この種のものばかりかというと，そうではない。たとえば，「-人（ニン）」は，人数をあらわすことがおおいけれども，「人（弁護～・料理～・使用～）」のような用法も，決してすくなくはない。あるいは，「-回」のように，回数をあらわす，つかわれかたしかないようにみえても，「最終-回」のような例をもつものもある。後者のようなばあいは，使用頻度からみて，助数詞としても，さしつかえなさそうだが，「-人（ニン）」のような例とのあいだには，さまざまのレベルがあって，一義的な処理はむずかしい。

あるいは，さきにのべたように，このなかで，純助数詞的なものだけを，＜数詞承接型＞として，独立させるほうが，強引かもしれないが，すっきりするともおもわれる。ただし，それを独立させる以上，他の語基についても，そ

の前部分にくる特徴的な語基によって，<○○承接型>という範疇をかんがえなければ，意味がないであろう。

こころみとしては，つぎのようなものが，かんがえられる。

人名承接型…氏・君・嬢・卿・公・翁／派／荘・邸・宅・著・編

地名承接型…州・県・郡・市・町／海・山・湖／港・駅・城・店・荘／大・高・中・小・商・工・校／軍・署・人(ジン)／発・着

固有名承接型…社・館・堂・座・寺・荘・寮・会

このそれぞれのグループは，たしかに，前部分に，人名なり地名なりがきやすいということでは，共通している。しかし，それ以上の共通点をもとめようとしても，むずかしい。意味の面からは，もちろんのこと，語基の品詞性という点でも，異質なものがふくまれている。また，その前部分に，人名や地名がきやすいにしても，百パーセント，そうなるのではないことは，助数詞のばあいとおなじである。しかも，語基によっては，「-荘」のように，どの型にも属する可能性をもったものさえある。

したがって，これらを，独立の一類とすることには，無理がある。けれども，体言型のなかの下位分類としては，みとめておいても，よいかもしれない。ただし，助数詞が，種々のものをふくみながらも，数量や順序をあらわすという点では，共通性をもつのと，助数詞専用の語基がかなりあるのとにくらべれば，その他の類を，特に，一類としてたてる積極的な理由はないとおもわれる。もっとも，上記の①で，おなじ意味範疇に属しているものに，意味以外の，どのような共通性があるかということになると，あまり，はっきりしない。もし，そうだとすれば，意味分類のしかたに，あいまいなものがあるか，語構成をかんがえるのに，意味分類を問題にすることが無意味かの，どちらかである。しかし，後者が語構成の分析に有効であることは，あとの章で，間接的ながら，言及するはずである。

②用言型は，後部分語基が動作・作用等の意味をもち，前部分の体言性語基とのあいだに，意味上の格関係をもつとともに，「…スルコト」という動作性の意味を有するものである。その点では，<活動>のなかのある種のものと，共通するところがある。たとえば，「苦心-談」・「海水-浴」のようなばあいであ

る。これらを，「苦心ニツイテ談ズルコト」，「海水ヲ浴ビルコト」のように解しても，意味的には，あやまりはない。しかし，さきにあげたような例とくらべると，「…スルコト」という動作的な意味が，これらの例には，稀薄なようである。また，「近海産のカニ」，「ドイツ製のかみそり」いう表現に対して，「苦心談の一席」，「海水浴の準備」といういいかたをくらべると，前者では，被修飾語の属性をしめしているのに，後者には，そのような感じがない。また，後者を，そのような意味でつかおうとしてもできない。それは，前者に，動作がおこなわれるだけでなく，それが完了した状態が継続している意味がふくまれているからである。

また，体言型としたものには，＜活動＞としたものだけでなく，一般に，単語相当の資格をもった，語基がふくまれる。たとえば，「局・会・王・僧・式・劇・愛・腸・像」などである。これらは，普通の和語の名詞性語基と，語構成上，なんら，ことなるところはない。体言型に属する語基のなかで，これらの性質をもつものは，むしろ少数であるが，そのほかの非自立的な語基も，これらに準じた性格をもっているとみられる。このような理由から，②用言型は，①体言型と区別される。

さきにも，のべたように，用言型の語基は，「…スルコト」という意味を付加する点に，特徴がある。しかし，「-産」や「-製」には，そのほかに，「なんといっても，タイは，近海産がうまい」，「かみそりは，いつも，ドイツ製をつかっている」のように，「…スルモノ」をあらわす用法もある。それに対して，「-化」や「-視」などは，「…スルコト」という意味しか，あらわせない。それは，「-化」や「-視」が，「…デトレルコト」，「…デツクルコト」のような，実質的な意味をあらわさず，「…トナルコト」，「…トミルコト」といった，抽象度のたかい概念をあらわし，補充成分を要求するようなものであることとも関係があるとみられる。

また，「-化」や「-視」は，「する」をともなって，結合形全体をサ変動詞の語幹にすることができる。これは，他の用言型語基とは，ことなる点である。つまり，他の語基が，用言的とはいっても，実質的な意味をもち，体言的な性格をのこしているのに対し，「-化」や「-視」は，意味が抽象化しているため，

ただ，動作的な意味をつけくわえるだけで，結合形全体を語としてまとめあげることができず，「する」をともなって，サ変動詞になることで，はじめて，安定したかたちになることができるのである。「-化」には，「経営の合理化をはかる」といった用法があるが，そのばあいでも，「…トナルコト」という意味をはなれず，むしろ，「合理化する」という動詞が名詞化して，「合理化スルコト」という意味をもっているというほうが，正確である。その点で，この「-化」などは，接辞的性格のこいものといってよい。

③相言型の語基は，「…ノヨウス」・「…ラシサ」といった意味をそえるとともに，結合形全体を形容動詞の語幹相当の性格にかえる特徴をもつ。結合形全体が「○○●ノ」というかたちで，体言を修飾することがおおく，その点では，用言型語基とにているが，「ガ」・「ヲ」などの格助詞をともなうことは，一，二の例をのぞいて，ほとんどない。また，「-的」のように，「○○●ナ」というかたちをとることがおおいものもある。また，「成功裏に大会はおわった」の「-裏」のように，「ニ」をともなって，用言を修飾することを，もっぱらとするものもある。

これらの相言型語基をふくむ結合形は，「…ノ」というかたちをとりやすいが，体言型語基のなかでも，<位置>をあらわす，ある種のものは，にた傾向をもっている。たとえば，「経済上の問題」，「捜査中の事件」，「フランコ統治下のスペイン」の「-上」・「-中」・「-下」などである。これらは「「地球上の生物」，「夏休み中の事故」，「炎天下の球場」のように，<場所>や<時>をあらわす語基につくばあいは，被修飾語との位置関係をしめす，はたらきをもっている。ところが，はじめにあげた「経済上」の「経済」のような抽象的な概念と結合すると，「…ニ関スル」といった意味しか，もたなくなる。また，「捜査中」や「統治下」のように，動作性の語基がまえにくると，その動作が現在おこなわれているという状態をあらわし，用言型の語基や相言型の語基とちかい性質をもつようになるのである。

しかし，これらの語基をふくんだ結合形とあとにくる語基の修飾関係が，相言型語基にちかくなるのは，一般にいって，所属や状態をあらわすばあいにかぎられる。それに対して，相言型語基のばあいは，被修飾語の性質を説明す

る，はたらきをもつ点に，ちがいがある。「経済上の問題」を「経済的な問題」といいかえても，あまり，ちがいはなさそうである。しかし，「経済的な生活」を「経済上の生活」といいかえることはできない。

相言型語基のなかで，「-性」だけは，他の語基とちがった特徴をもっている。「植物性のマーガリン」，「アレルギー性の体質」のようなばあいは，他の語基とおなじである。ところが，「感受性がつよい」，「問題の重要性を認識する」のようなばあいは，「…スルコト」・「…デアルコト」の意味がつよく，「○○●ノ」というかたちで，修飾語となることはない。このような用法は，むしろ，体言型といってよい。このちがいは，「-性」の前部分にくる語基の性質によって，うまれるものである。すなわち，前部分に名詞性の語基がくるばあいは，相言的な性質をもち，サ変動詞の語幹あるいは形容動詞の語幹に相当する語基がくるばあいは，体言的な性質をそなえるのである。このように，前部分にくる語基と結合して，結合形全体の品詞性を，前部分の語基とことなるものにかえるところに，「-性」の特徴がある。このような性質については，つぎの章で，考察することにする。

3. 接辞性字音語基の機能

3.1 語基と接辞

これまで，考察の対象とする言語単位を，字音語基と仮称して，分析をおこなってきた。その理由は，その前後の語基との結合のしかたを，観察するにあたって，語基と語基の結合という，一般的なパターンをベースとして，分類することによって，それぞれの差異をとらえようとするためであった。しかし，すでに，用法の分類の際に，少数ではあるが，他のものとことなる性格のものについて，「接辞的」というような，いいかたもしている。ここでは，それらを一括して，この種の字音形態素の語構成単位としての機能について，考察をする。

語基と接辞のちがいは，はじめにのべたように，形態・意味・機能の三つの観点から，とらえられる。くりかえしになるが，整理したかたちで，対比してみると，つぎのようになる。

(1) 語基は，単独でも，語を構成することができるが，接辞は，語基と結合してしか，語の成分となることができない。

(2) 語基は，語の中核となる実質的な意味をあらわすが，接辞は，形式的な意味しかあらわさない。

(3) 接辞，特に，接尾辞には，語の品詞性（文法的機能）を決定する機能をもつものがある。

まず，(1)について，検討する。ここで問題にしている，字音語基のおおくが，単独では，語を構成することができない，ということは，さきにのべた。しかし，単独でも，語を構成できるものもある。それと，非自立的なものとのあいだに，明確なちがいがあれば，両者を区別する指標として，語構成能力をとりあげることが可能である。けれども，つぎのような比較をしてみると，意味のうえで，その実質性の度合いに，ほとんど，差があるとは，おもわれない。

肉（輸入～）⇆ 魚（冷凍～）　市（特別～）⇆ 村（無医～）
劇（児童～）⇆ 歌（流行～）　本（文庫～）⇆ 書（教養～）
愛（郷土～）⇆ 心（宗教～）　点（平均～）⇆ 値（偏差～）

また，複合語基（二字漢語）で，辞書などでは，名詞あつかいされるものでも，単独で，語を構成するという点で，かならずしも，そうした性格をそなえているとは，みられないものもある。つぎのような例である。

国際（～性）・具体（～策）・本格（～派）・民主（～主義）
抜本（～的）・共産（～化）・対外（～貿易）／本位（実用～）

これらは，意味的には，語の中核となることができるが，形態上は，それ自身で，語を構成することができない。他の語基あるいは接辞と結合して，複合・派生などの方法で，はじめて，語中に出現しうるものである。また，うえの「本位」のようになると，語基というよりは，かなり接辞にちかいといってよい。

つまり，接辞がつねに，他の語基とむすびつかなければ，語形成に参加することができないという条件は，語基か接辞かを判定する指標として，字音形態素のばあいには，かならずしも，有効なものとは，いえない。字音形態素が，形態的には，不安定でも，意味のうえで，語基と同等の資格をもっているばあ

いには，それを接辞とすることには，無理がある。

それでは，(2)の条件の，意味の実質性という点で，接辞とみられる，字音形態素をとりだすことができるだろうか。たしかに，前章でみたように，字音形態素のなかには，意味が抽象化し，形式的になっているものも，ありそうである。しかし，つぎのような例で，その差異を抽出することができるだろうか。

ア　法$_1$（国際～・農地～・薬事～）⇆ 法$_2$（治療～・飼育～・利用～）

イ　流$_1$（沿岸～・土石～・溶岩～）⇆ 流$_2$（自己～・金釘～・草月～）

ウ　料$_1$（調味～・着色～・香辛～）⇆ 料$_2$（授業～・手数～・保険～）

アやイについては，1よりも2のほうが，形式的だということがいえるかもしれない。アの1には，「法をまもる」，「法の番人」，「法（～秩序）・法（～改正）」のような，つかいかたもあり，自立的でもある。したがって，2よりも，実質的な性格がつよそうである。イについては，「ながれる」という訓との対応から，1のほうが本来の意味で，2のほうが派生的だという，みかたもできそうである。しかし，ウでは，どうだろうか。字源をしらないかぎり，どちらが本来の意味ということもいえないし，実質的，形式的ということを，どのようにかんがえるにしても，両様の解答がでてきそうである。

アやイについて，1と2の比較が可能なのは，それぞれが，おなじ漢字で表記され，おそらくは，一方の意味から，他方の意味が派生したという前提があるからである。ウで，それができないのは，これらを比較する，てがかりがないためである。もし，「法$_1$」と「流$_2$」のどちらが実質的かということになれば，かんたんに，くらべることは，できないはずである。

もし，「名-選手」の「名-」と「両-選手」の「両-」とをくらべて，「両-」のほうが形式的だとする。また，「旅行-客」と「旅行-者」では，「-者」のほうが形式的だと仮定する。それゆえに，この「両-」と「-者」を接辞だと認定したとする。そうすると，「両者」という二字漢語は，二つの接辞から構成されていることになる。これは，あきらかに，矛盾である。

つまり，意味のうえで，実質的，形式的という差は，そう単純には，とらえられないものである。もちろん，そういう差がないというのは，いいすぎであって，大局的にみれば，そういう，いいかたも可能だろう。しかし，それは，

相対的な程度の差であって，語基とされるものと，接辞とされるものとのあいだに，そのような傾向差が抽出されるとしても，個々の形態素が，語基か接辞かということを判断する際の尺度には，なりそうもない。

そうなると，さきの三条件のうち，(1)と(2)は，字音形態素の性質をはかる指標としては，失格ということになる。そして，のこったのは，(3)の品詞性決定機能である。

3.2 字音形態素の品詞性決定機能

一般に，接尾辞の機能として，語の文法的な性格を決定するということがあげられる。たとえば，「なみだ」という名詞に，「ぐむ」という接尾辞がつくと，「なみだぐむ」という動詞になり，「なみだぐむ」に「しい」という接尾辞がつくと，「なみだぐましい」という形容詞ができる，というようなばあいである。これを，式であらわすと，つぎのようになる。

なみだ＋ぐむ → なみだぐむ　　A＋c→C

なみだぐむ＋しい → なみだぐましい　　C＋b→B

以下では，このように，語構造を，A，Bなどの記号で，しめすことがおおい。大文字は，語基をあらわし，小文字は，接辞を意味する，ここで，問題としている，接辞性の字音形態素は，小文字であらわすことにする。また，A，Bの区別は，つぎのとおりである。これについては，これまでも，この分類をもちいてきたので，説明は省略し，字音語基の実例のみをあげる。（語基の分類については，宮地裕の論考がある。→文献⑨。和語や外来語の語基についても，例をあげるべきだが，特に，和語では，語基と語のあつかいについて，漢語とは別のてつづきが必要なので，ここでは，ふれない。）

A・a（体言類）…宇宙・人間・鉄道・工業／鉄・国（コク）・機・士

B・b（相言類）…簡単・重要・豪華・貴重／新（シン）・早（ソウ）・軽（ケイ）・総

C・c（用言類）…運動・変化・出発・検討／増（ゾウ）・反（ハン）・有（ユウ）・過（カ）

D・d（副言類）…突然・直接・一斉・結局／再・最

ここで，留意しなければならないのは，字音語基の性格である。うえの分類は，形態と意味の両面からおこなったものであるが，形態的にいえば，字音語基は，すべて，名詞的であり，A類をのぞけば，複合語基でさえも，それだけ

で，文中の語となる資格をもってはいない。「スル」・「ノ」・「ナ」・「ニ」などの助辞をともなって，語となるときに，その形態的な特徴があらわれるわけであって，語基とは，語より，下層のレベルの概念である。したがって，「なみだ」と「ぐむ」が結合した「なみだぐむ」が，そのまま，文中で，動詞として機能できるのに対して，「有望」と「視」が結合した「有望視」は，それだけでは，語とは，なりえない。さらに，「スル」をともなって，はじめて，語としての資格をもつことになる。したがって，用言類，相言類といっても，名詞性の語基のなかの分類であって，それが，そのまま，動詞や形容動詞になるといったものでないことを，名詞性の決定ということについては，かんがえておかなければならない。（たとえば，「健康」が名詞か形容動詞の語幹か問題になるのは，品詞のレベルであって，語基のレベルでは，どちらにもなりうるという一類をたてておけば，すむ。）また，品詞性の決定が，かならずしも，接辞だけによって，おこなわれるのでないことにも，留意しておく必要がある。和語で，「こころ」と「くるしい」が結合した「こころぐるしい」は，形容詞である。それは，後部分の語の品詞性によって決定されたものである。（このばあいには，語基という単位を，かんがえる必要はないであろう。）したがって，接辞性字音語基のばあいは，おくとしても，複合字音語基が後部分にくるばあいは，結合形としての，より高次の複合語基の品詞性は，ほとんど，それによって決定されるのである。たとえば，つぎにあげるような例である。

乱＋気流 → 乱気流	c＋A → A
有望＋選手 → 有望選手	B＋A → A
最＋重要 → 最重要	d＋B → B
栄養＋豊富 → 栄養豊富	A＋B → B
急＋上昇 → 急上昇	b＋C → C
食欲＋増進 → 食欲増進	A＋C → C

しかし，これらのばあいに，後部分語基の品詞性決定機能などということが問題にされないのは，形態の面だけでなく，意味のうえでも，後部分語基が中心になっていることに，かわりがないからである。「有望選手」は，「有望」を

「欠陥」におきかえたところで，「選手」であることにかわりはない。しかし，「有意義」の「有」を「無」にかえたり，あるいは，「積極的」を「消極的」といいかえたりすれば，まったく反対の意味になってしまう。接辞性語基の機能が問題になるとすれば，こういう観点からであって，品詞性の決定ということも，意味の面と，まったく無関係に決定することは，できないであろう。もっとも，前部分と後部分のどちらに，意味の重点があるかなどという比較をはじめれば，また，実質的な意味と形式的な意味の比較のようなことになる，おそれはある。

3.3 前部分の接辞性語基の機能

一般に，接頭辞については，ただ意味をそえるだけで，品詞性決定機能はないとされている。もし，そうだとすれば，前部分語基が，語基か接辞かを判定する尺度は，形態と意味の両者にかぎられることになり，まえにのべた問題をここで，くりかえさなければならないことになる。しかし，この前部分語基のなかには，まえにふれたように，結合形全体の品詞性をかえる機能をもつとみられるものがある。ただし，その検討は，あとまわしにして，形態と意味の面からの考察をおこなう。前部分語基は，後部分語基にくらべると，その面からの分析が，比較的容易だからである。

①体言型の語基は，いずれも，語基とみなして，さしつかえない。これらのうちで，自立できるものの比率は，後部分で体言型としたものの，それよりも，はるかにおおきい。あとにくる語基との関係は，ふつうの「名詞＋名詞」タイプの複合語とおなじように，とらえることができる。また，「軍-首脳」「国連-軍」のように，意味をかえずに，後部分の語基となることがおおいのも，語基的な特徴とみられる。（ただし，なかには，「性-生活」の「性」のように，そのままの意味では，後部分の語基とは，なれないものもある。）

a＋A → A　熱-力学，茶-道具，県-知事，女-生徒

a＋B → B　銅-不足，芸-熱心，心-不全，筋-無力（～症）

a＋C → C　核-保有，脳-出血，法-改正，菌-培養

②連体修飾型は，形態的には，非自立的なものがおおいが，意味的には，二字漢語の成分のばあいと，ほとんどかわらない。また，当然のことだが，A類

と結合するものがおおく，C類と結合するばあいも，A類相当のものとして，結合することがおおい。したがって，これらを，接辞とする根拠はよわく，接辞的ではあっても，接辞とするのは，問題がある。

b＋A → A　新-製品，悪-条件，静-電気，怪-文書

b＋B → B　（弱-酸性）

b＋C → C　深-呼吸，温-湿布，快-進撃，密-入国

c＋A → A　動-資源，減-収益，打-楽器，乾-電池

c＋B → B　（該当例なし）

c＋C → C　乱-反射，試-運転，連-安打，追-送検

③連用修飾型は，後部分に，B類およびC類の語基がきて，それを修飾する点に特徴がある。しかし，接辞かいなかということになると，二字漢語の前部分としての用法と，意味上は，かわりがないため，②連体修飾型とおなじく，接辞的というのが妥当なところとおもわれる。

d＋B → B　最-重要，正-反対，極（キヨク）-微小（科学技術用語）

d＋C → C　最-優先，再-検討，

予-混合（科学技術用語），自-破砕（同前）

この類のなかで，注目すべきなのは，「最-」である。「最-重要」，「最-優先」のような例のほかに，「最-下位」，「最-前線」，「最-高潮」，「最-重点」のように，A類につく例があるからである。ただし，これらのばあいでも，意味的には，あとの部分の二字漢語のうち，前部分にある「下・前」などの位置をあらわす単純語基，および，「高・重」の相言性の単純語基にかかっているとみることができる。その点で，この用法の「最-」は，あとにのべる「非-」などと類似している。

前部分語基のなかで，もっとも異色なのが，⑥否定変換型の「無-」・「不-」・「未-」・「非-」である。これらについては，すでに，文献③でくわしい考察をおこなったことがあるので，なるべく，再論はさけるが，前部分語基全体のなかでの位置づけをしてみたい。

まず，「無-」と「不-」については，つぎのような記述ができる。

b＋A → B　無-条件，無-関心，不-景気，不-道徳

b＋B → B　不-十分，不-必要

b＋C → B　無-理解，無-責任，不-安定，不-注意

この「無-」と「不-」は，結合形全体をB類化することで，共通している。後部分にくる語基の種類，および，結合形の「ナ」と「ノ」がどちらにつきやすいかなどの点で，多少の相違はあるが，これらを接辞とみれば，接頭辞には，品詞性決定機能がないといわれることへの，有力な反証となる。ただし，少数ではあるが，これら以外にも，「大（～規模）」・「小（～規模）」・「有（～意義）」のように，おなじ性格をもつものがある。これらは，「b＋A」という構造をもつが，連体修飾的な関係でなく，「AガbデアルヨウスJ」という意味関係をもっているために，品詞性がかわるものである。（「有-」は，c類であるが，状態動詞であるため，b類とちかい用法をもつとかんがえられる。和語の「父親-似」・「男-まさり」などの例も参考となろう。）

つぎに，「未-」は，後部分に，C類の語基しか接続しない点に特徴がある。（「未-成年」だけがやや例外的である。）したがって，d類として記述することが可能である。

d＋C → B　未-完成，未-発表，未-確認

もし，「未-」をd類とすれば，他には，d類にこの種のものがないので，例外的な存在となる。ただし，「既-発表」という，孤例があることにはある。

「非-」は，否定的な意味をそえるという点では，他の三種と共通しているが，ほかの点では，異質である。もっともおおきなちがいは，「非-」には，品詞性をかえる機能がないことである。

b＋A → A　非-国民，非-戦闘員，非-共産勢力，非-汚染地区

b＋B → B　非-科学的，非-友好的，（非-粘着性，非-公務中）

「b＋A」のばあいでいえば，「非-」は，たしかに否定の意味をそえている。しかし，それによって，「Aデナイコト」や「AデナイヨウスJ」という意味をあらわしていない。「非-戦闘員」は「戦闘員デナイ人員」，「非-汚染地区」は「汚染地区デナイ地区」というように解される。つまり，「Aデナイ別ノA」なのである。「b＋B」のばあいでも，「…デナイヨウス」という意味をもつのは，後部分語基に，全体をB類化する「的・性・中」などの語基があるからで

あり，「Bノヨウスデナイヨウス」という意味をあらわしているのである。

ところが，「非-」には，「非-常識」，「非-能率」，「非-衛生」などの用法もあり，一見すると，「b＋A→B」という機能をもっているかのようにみえる。これは，うえの例でいえば，「非-戦闘員」や「非-科学的」で否定されているのが，意味的には，「戦闘」や「科学」であることによっている。つまり，「非-常識」の類は，本来，「非-○○的」といういいかたの，意味的に否定される「○○」の部分がのこり，「的」の類がおちてしまったため，みかけのうえで，「○○デナイヨウス」という構造をとるにいたったものである。したがって，「非-」の結合対象は，おおむね，「非＋（P＋Q)」といった，ながい結合形をとるものがおおい。この点でも，「無-」などとは，ことなっている。「非-公式」などという例も，「非＋（公式＋○○)」という結合形式がおおいため，「(非＋公式)＋○○」という解釈がなりたって，うまれたものとかんがえられる。つまり，「(非＋P)＋Q」という解釈が生じたわけである。このことは，ほかの例からも，証明される。

⑤用言型は，一般に，つぎのように記述できる。

c＋A → C　反-政府（～運動)，駐-韓国（～大使)，立-候補
　　抗-ヒスタミン（～剤)，要-注意（～者)，超-党派
　　省-エネルギー，脱-サラリーマン，耐-アルカリ（～性)

c＋C → C　過-冷却，被-選挙（～権)，可-処分（～所得)

これらは，「Aニ（ヲ）cスルコト」という意味をもち，みかけの構造がひとしい「c＋A→A」とは，ことなる機能をもつ。(「被-」・「可-」などは助動詞的といえよう。）そして，注記にしめしたように，結合形全体が，連体修飾的な関係で，他の体言型語基と結合することがおおい。その点では，結合形をCとするよりはBとすべきかもしれない。

ところで，このなかには，「反-主流」，「超-短波」のように，「c＋A→C」とはことなる構造をもつようにみえるものがある。まず，「反-主流」についてかんがえると，これは，「反-主流派」ないし，「反-主流勢力」という結合形から，うまれたとみられる。つまり，もともとは，「A(P＋Q)ニ反スルコト」という意味だったのが，「(Pニ反スル）Q」のように解され，さらに，「反-

P」という形式がうまれたとみられる。その点で，「非-○○」というかたちの成立と，軌を一にしている。「非-主流」という結合形の存在も，その証となろう。

また，「超-短波」のばあいは，「c＋A→A」のように解されるが，これも，本来は，「Aヲcスルコト」→「Aヲcスル（＝AヨリモモットO○ナ）A」という過程から生じたとみられる。なぜならば，この種のものには，「超-高層」，「超-大作」，「超-巨星」のように，後部分の複合字音語基の前部分に，相言性の語基がふくまれているものがおおい。つまり，「超＋(p＋q)」という構成でありながら，意味的には，「(超＋p)＋q」という関係をもっているわけである。この点でも，「非-」が「非＋(P＋Q)」という構造をもちながら，「(非＋P)＋Q」という解釈を可能にしたのとにている。「超-豪華」とか「超-デラックス」という，いいかたがうまれる理由は，この点にあるといえる。

これらの「非-」，「反-」，「超-」は，それぞれ，多少の差異はありながらも，「□＋A→A」という機能をもつ点で，共通している。(「非-」には，「非-人情」，「非-会員」，「非-科学」などの例がある。) つまり，「□＋A」→「Aトハ別種ノA」という構造をもっているわけである。これは，さきにふれた，「b＋A→A」や「c＋A→A」とみかけは，にているが，ことなる性格のものとかんがえるべきである。なぜならば，「b＋A」や「c＋A」は，「Aガbデアルcシテイル)，ソノA」といいかえられるのに対し，「□＋A」は，それができないからである。

この種の語基とおなじ性格をもっているのが，④連体詞型の「同-」，「本-」，「当-」などのグループである。これらは，ふつう，指示機能をもつために，連体詞にちかい性格とみられるのであるが，これまでと同様の方法で，「非-」などとおなじグループであることが証明できる。

「同大臣は，つぎのようにかたった」という文の中で，「同大臣」は，そのまえの文脈のなかで出現した某大臣と同一の人物であることをしめしている。もし，ほかにまぎれそうもなければ，わざわざ「同-」をつける必要はない。あるいは，まぎれないまでも，よみてに，まえにでてきた人物と同一であることを喚起する程度の意味はあるだろう。つまり，「ホカノ大臣デハナイ，ソノ

大臣」ということを強調する表現とみられる。これは，さきほどの「非-」の類と正反対の構造である。「非-」のばあいが，「Aトハ別種ノA」という意味であったのに対し，このばあいは，「別種ノAデハナイ，ソノA」という意味構造なのである。これは，「本-大学」，「当-商店」の「本-」・「当-」でもおなじである。つまり，「非-」のグループと「同-」のグループとは，まったく別の意味のようにみえながら，単に，観点をひっくりかえしたのにすぎない。

このことは，多少，意味のずれはあっても，連体詞的とみられる，他の語基にも，あてはまる。「故-〇〇氏」は，「生キテイルホカノ山田氏デハナイ，死ンダ山田氏」ということになる。「各-大学」は，「ホカニモレテイル大学ハナイ，ソレゾレノ大学」という意味に解せる。このような解釈は，かなりb的(c的)だとおもわれる，「亜-熱帯」，「準-決勝」，「助-教授」などにも適用できるだろう。

これまでも，連体詞的な「同-」と，連体修飾的な「同-」との区別については注意されてきた。しかし，うえのようなかんがえかたを適用すれば，そのちがいは，より，はっきりするだろう。後者の「同-学年」，「同-順位」などは，「b＋A」→「Aガbデアル，ソノA」という一般的な構造としてとらえられるのに対し，連体詞的な「同-」には，それがあてはまらない。つまり「Aガbデアル，ソノA」というものさしによって，「b＋A」的な構造を分類することができる。(もっとも，両者の境界的なものはある。たとえば，「新-社屋」の「新-」など。)

また，連体詞的なものと，連体修飾的なものとは，前部分と後部分のあいだに，ポーズがおかれることや，結合形のアクセントがもとのアクセントとことなるかいなかということについても，指摘がある。この区別は，それほど厳密なものではないとみる説が有力ではあるが，まったく，無意味なものでもないとおもわれる。「非-科学的」のように，「ヒ・カガクテキ」と「ヒカガクテキ」のような，ゆれがみられるものには，それだけの理由があるようにおもうが，十分な考察をしていないので，これ以上は，論究しない。

以上，「非-」の性格を中心に，前部分語基の性格を検討してきたが，おおよそ，つぎの4類になるとおもわれる。

(1) 体言的な語基

(2) 修飾語的な語基

(3) 連体詞的な語基

(4) 品詞性決定機能をもつ語基

(i) 用言性語基　(ii)否定辞性語基（無・不・(未)）

3.4 後部分の接辞性語基の機能

後部分の語基のばあいは，前部分ほど，問題になる項目は，おおくない。なぜならば，結合形全体の性質が後部分要素によって決定されるのは，一般の複合語のばあいと，ほとんど，おなじであり，意味の形式性ということを問題にしなければ，大部分の語基が類似の性質のものとみられるからである。また，さきの用法の分類そのものが，結合形の品詞性を基準としたもので，おおよその検討をおえているからでもある。そこで，ここでは，さきに問題となった，「-性」，「-化」，「-的」を中心に，その性格を分析することを中心に，他の語基は，それに付随させるかたちで，検討をおこなうことにする。

まず，「-性」であるが，前部分にくる語基の種類に，かなりのかたよりがみられる。

A＋性　植物-性，火山-性，大陸-性，金属-性，人間-性

B＋性　安全-性，可能-性，柔軟-性，危険-性，必要-性

C＋性　信頼-性，持続-性，一貫-性，移動-性，発展-性

「C＋性」に属するものがもっともおおく，「B＋性」が，それにつぐ。「A＋性」は，いちばんすくない。また，BともCとも判定できない，非自立性の語基が前部分にくることも，おおい。「耐久-性」，「防音-性」，「可塑-性」などの例がそれである。科学技術用語では，「耐○○-性」，「可○○-性」という結合形がよくみられる。

また，「B＋性」，「C＋性」は，「Bデアル（Cスル）コト」という意味で，「～性ガ（ヲ・…）」と格助詞をともなうことがおおいのに対して，「A＋性」のばあいは，「～性ノ」というかたちで，連体修飾語になる傾向がつよい。つまり，傾向としては，「-性」の機能は，前部分の語基の品詞性をかえる，はたらきにあるといってよいだろう。

A＋性 → B　　B＋性 → A　　C＋性 → A

ただし，「A＋性」でも，「人間-性」，「将来-性」のように，連体修飾機能をもたないものもある。そのばあいは，体言型語基としての性格がつよい。また，「C＋性」でも，「移動性の高気圧」，「耐熱性ガラス」のような用法があり，その差は，相対的なものとみられる。

「-化」は，前部分にくるA類とB類の語基につきやすく，C類の語基とは，結合しにくい傾向がみられる。

A＋化　機械-化，近代-化，映画-化，制度-化，市街-化

B＋化　複雑-化，正常-化，活発-化，簡素-化，無人-化

C＋化　固定-化，孤立-化，組織-化

このことは，「-化」のもつ，「A＋化→C」，「B＋化→C」という，品詞性変換機能をよくしめしている。うえの「C＋化」とみられるものも，それぞれ，B類的あるいはA類的ともみられる。「-化」のついた結合形は，「○○化-する」のように，「スル」をともなって，サ変動詞を構成するとともに，自由に格助詞をとりうるが，「○○化ノ」というかたちで，性質や状態をあらわす修飾語となることはできない。その点で，他の用言型の語基である，「国内-産」，「外国-製」などとは，ことなる。そのばあいには，「○○化シタ」というかたちをとるのが普通である。

「-的」にも，「-化」と同様に，前部分にくる語基に，一定の制約がある。

A＋的　政治-的，科学-的，世界-的，効果-的，印象-的

B＋的　（積極-的，本格-的）

C＋的　圧倒-的，代表-的，徹底-的，連続-的，総合-的

量的には，A類が圧倒的におおく，その他はC類で，純粋にB類であるとみられるものはない。ただし，「積極-的」，「具体-的」，「合理-的」，「民主-的」など，前部分によくあらわれる，非自立性の複合語基をB類的なものとみれば，B類とも結合するとみられる。しかし，純B類的なものがないのは，「-的」の性格からみて，当然である。つまり，「A＋的 → B」，「C＋的 →B」というのが，「-的」の本来の機能であって，B類の語基は，「-的」を必要としないからである。「積極」などの非自立的複合語基が，B類らしくみえるのは，「-的」

と結合してもちいられることがおおいため，そのような性格をおびつつあるように，おもわれるせいかもしれない。(見坊豪紀は，「積極-さ」という結合形が合文法的であることを立証するために，豊富な事例を引用して，「積極」という語基が相言的であることを証明している。→文献⑩)

「-的」と同類の「-式」・「-用」・「-風」などにも，「-的」とにた性格がみとめられる。ただし，前部分にくる語基に，意味分野などの制約がくわわること，また，非自立的な語基とは，結合しないことなどのちがいがある。さらに，「-的」が連体修飾のばあいに，「○○的ナ」というかたちをとることがほとんどであるのに対して，他の語基は，「○○●ノ」という形態をとりやすいことなどのちがいがある。

後部分の語基のなかで，これらの「-性」・「-化」・「-的」は，接辞性のこいものとみられる。その理由として，これらの語基は，結合形全体の品詞性を決定するにあたって，ただ，全体を名詞化するというだけでなく，サ変動詞や形容動詞の語幹に相当する複合語基を形成したり，「○○ノ（ナ）」というかたちで，連体修飾語となるばあいにも，一定の規則性がみられたりする点で，他の語基とは，ことなる特徴をもっている。また，結合対象となる前部分の語基の品詞性にも，一定の制約があり，ある範囲の語基ならば，どれとも結合するが，他の範囲の語基とは，結合しにくいといった規則性がみられる。

前部分の語基との結合の傾向および結合形全体の品詞性について，これまでにのべたところを整理すると，つぎのようになる。

	A類	B類	C類
-性	A，B	A	A
-化	C	C	×
-的	B	B	×

これらが接辞的であることの証明には，なお，意味の形式性ということをいわなければならないが，それについては，つぎのようなことがいえるだろう。これまでにもふれたように，これらは，「積極」，「国際」などの品詞性のあいまいな非自立性複合語基と結合しやすい。この種の複合語基は，「積極-外交」，「国際-人」のように，他の体言性の語基と結合することもあるが，これらの接

辞性の語基と結合することによって，安定した単位となることがおおい，つまり，これらの接辞性の語基は，実質的な意味をもつ，非自立性の語基と結合して，それに形式的な意味をあたえつつ，品詞性を確定させる，機能をもっているといってよいだろう。

それぞれによって，多少のちがいはあるが，非自立的な語基で，使用頻度のたかいものとは，どれも，結合しやすい傾向をもっているとみられる。つぎに，データに出現した，結合例の分布をしめす。

	国際	積極	合理	民主	自主	必然	本格	画期	抜本
-性	○	○	○	○	○	○	×	×	×
-化	○	○	○	○	×	×	○	×	×
-的	○	○	○	○	○	○	○	○	○

このほかに，後部分語基では，「建設-中」の「-中」，「事実-上」の「-上」など，位置関係をあらわすものの，転義的な用法には，注目してよい，品詞性決定機能があるとみられる。また，「大学-卒」，「○○市-立」の「-卒」，「-立」などの用言性語基も，その意味で注目してよい。

3.5 造語成分というかんがえ

以上にみてきたように，はじめに，接辞性字音語基として，考察の対象とした，字音形態素には，種々の性格のものがあった。しかし，このうち，純粋の接辞とみられるものは，前部分の「無・不」，後部分の「性・化・的」のほか，用言的なものをのぞくと，そうおおくはない。しかし，それでは，その他のものがすべて語基かというと，形態的な面，意味的な面で，わりきれないものがのこる。

形態的に，自立性のないものが，ほとんどであることは，当然としても，意味の面からも，接辞として，積極的に認定できるほどではないけれども，かなり接辞にちかいものが存在することもたしかである。たとえば，＜人間＞をあらわす語基を，つぎのように分類すれば，アの語基から，オの接辞までのあいだに，ア＞オの順に，語基と接辞の中間的なものが位置することが，わかるであろう。

ア．王（本墨打～），僧（破戒～），客（買物～）

イ．医（主治～），兵（脱走～），工（溶接～），生（大学～）

ウ．員（作業～），士（建築～），師（調理～），家（作曲～）

エ．者（指導～），民（避難～），人（ニン）（管理～），人（ジン）（有名～）

オ．氏（○○～），君（○○～），公（西園寺～），卿（バウラ～）

このような，中間的なものを，イは語基とする，エは接辞とみなすというように，区分していっても，それでは，ウはどちらかということになると，もう，きめてはない。そこで，この種のものを，語基と接辞の中間的なものとして位置づける，かんがえかたがうまれる。一部の国語辞書で，とっているような，「造語成分」とか「語素」という，あつかいである。このかんがえかたは，基本的には，まちがっていないとおもわれる。ただし，その名称の問題もふくめて，語基とその類との差異，接辞とその類との相違などについて，明確な規定をする必要がある。また，その類のなかには，現在の辞書で単語あつかいをしている，「国際」・「積極」などの非自立性字音複合語基や，和語・外来語の「建て（～物）」，「乗り（船～）」，「早（～起き）」，「エンド（ウイーク～）」などが，ふくまれなければならないだろう。

また，本稿では，あまりふれることがなかったが，助数詞や固有名承接型の語基は，接辞とみることができるだろう。ただし，接辞のなかで，どのような位置づけがなされるかは，十分に検討することができなかった。

このような方法で，字音形態素の性格を分析していくことは，有効ではある。しかし，これ以上ふかく分析をすすめようとするならば，二字漢語の成分としての字音形態素や，和語，外来語の形態素との比較を，おこなわなければならない。それについては，ほとんど，てをつけることをしなかったが，今後にのこる，おおきな課題である。

4. おわりに

前章の最後にのべたように，ここでとりあげたテーマは，さらに重要な問題に発展する，可能性をふくんでいる。しかし，このテーマの範囲内でも，とりあげようとしながら，執筆のふてぎわで，はたせなかったものが，いくつかある。

ひとつは，類似の意味・用法をもつ語基のちがいを記述する方法をこころみることである。たとえば，「-人(ジン)」と「-人(ニン)」は，意味的には，ほとんどおなじであるが，機能的には，相補関係にある。それをおこなうためには，意味分野による語基の分類が有効になってくる。

つぎに，ここで対象としたデータが新聞の文章によるものであったため，それがどれだけ有効かということを，科学技術用語と比較しようとして，はたせなかったことがある。語基の種類にも，かなりのでいりがあるほか，両者に共通するものでも，用法が，ことなっているものもある。このことは，同一の字音であらわされる単位を，どのように認定・分別していくかという点で，重要である。

さらに，このような考察が，言語情報処理の分野で，単語の分割に，どのように応用できるかということがあげられる。「次亜弗素酸塩」とか「絨毛膜性性腺刺激ホルモン」といった，ながい結合形をもつ，専門用語を，機械に，どのように，意味的にも順序ただしく，単位分割させるかということは，構文解析の問題とともに，いま，解決がいそがれているものである。それについて，試案めいたかんがえをもってはいるが，のべることができなかった。

最後に，接辞性字音語基が，今後の日本語の造語に，どのようにかかわっていくかということに，ふれて，おわりにしたい。これまで，字音形態素は，造語力にとんでいるということで，注目されてきた。しかし，それが他の字音形態素と結合して，安定性のある複合語基，すなわち，二字漢語をつくりだすことは，もう，おわりにちかづいているとみられる。それについて，のべている余裕はないが，そのことをしめす，数字がある。

後部分語基の「-者」には，二字漢語の成分としての用法もある。新聞の調査に出現した，「□-者」と「□□-者」について，結合対象となった語基のかず，つまり，語構成成分となっている語の種類と，のべの使用数を対照してみると，つぎのようになっている。

二字漢語の成分としての用法（□-者）

50種類／1136回（医者・王者・学者・患者・記者・作者・打者・…）

接辞性語基としての用法（□□-者）

376種類／2508回（愛読者・科学者・関係者・技術者・経営者・…）

さきに，量的な側面についてみたときに，字音形態素の全使用数のなかでは，二字漢語の成分としての用法が圧倒的におおかったことを，おもいあわせると，この数字は，意外な感がする。しかし，二字漢語の成分のなかには，そのまま死蔵されて，もはや，造語力をもたないものと，そのそとに，とびだして，この「-者」のように，なおも造語活動をつづけているものと，二種類あることをかんがえなければならないだろう。われわれが，将来の日本語の造語について，重視する必要があるのは，もちろん，後者であるのは，いうまでもない。小稿をものにするにあたって，はじめに，そんなことも，かんがえていたのである。

(1977. 10. 31)

〔文　　献〕

① 宮島達夫「無意味形態素」(国立国語研究所論集『ことばの研究４』所収，1973)
② 森岡健二「日本文法体系論(11)」(『月刊文法』１巻13号所収，1969)
③ 野村雅昭「否定の接頭語『無・不・未・非』の用法(前掲①論集所収，1973)
④ 野村雅昭「三字漢語の構造」(国立国語研究所報告51『電子計算機による国語研究VI』所収，1974)
⑤ 野村雅昭「四字漢語の構造」(国立国語研究所報告54『電子計算機による国語研究VII』所収，1975)
⑥ 野村雅昭「造語法」(岩波講座日本語９『語彙と意味』所収，1977)
⑦ 国立国語研究所報告56『現代新聞の漢字』(1976)
⑧ ＪＩＣＳＴ科学技術用語シソーラス1975年版『キーワード リスト』
⑨ 宮地裕「現代漢語の語基について」(大阪大学『語文』31輯，1973)
⑩ 見坊豪紀「新しい名詞『積極さ』の発見」(『小松代融一教授退職・嶋稔教授退官記念国語学論集』所収，1977)